おしえて満田先生

成長曲線について

満田直美先生　高知大学医学部附属病院小児科医師
2歳男の子と今年の夏に生まれた女の子の子育てに奮闘中です

成長曲線とは、たくさんの子どもの身長や体重の記録を集めて男女別、年齢別に標準値を曲線で示した表です。SD（標準偏差）とは、平均値からどのくらい離れているかを示すもので、−1.0SDから＋1.0SDの間に約68％、−2.0SDから＋2.0SDの間に約95％の子どもが含まれ、−2.0SD以下の低身長の子どもは100人のうち2〜3人くらいの割合になります。（※下図参照）

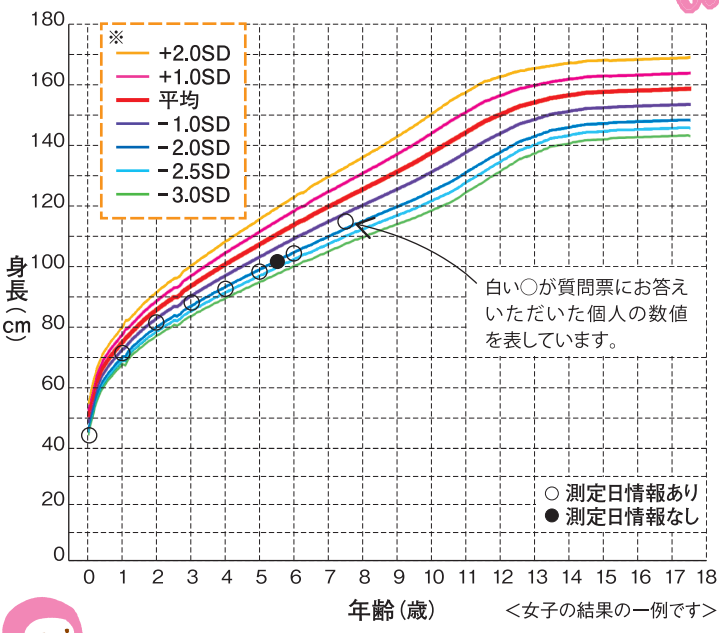
子どもの身長が低い原因の多くは遺伝や体質によるものです。しかし、中には成長ホルモンなど身長を伸ばすホルモンが少ない、小さく生まれた、染色体や骨の病気、などによって身長が伸びない場合もあり、これらの場合は早めに治療を受けることで身長が伸びます。一方で、急激に身長が伸びているお子さんの中には、標準より思春期が早く始まってしまっているケースもあります。この場合早期に体が完成してしまうために、一時的に身長が伸びた後、小柄のまま身長が止まってしまう可能性もあり、思春期が進まないように治療することで、身長が伸びる期間を長くすることができます。

子どもの発育のパターンはさまざまで、身長の伸びが標準的な範囲を大きくはずれていなければあまり問題はありません。とはいえ、−2.0SDを下回る、あるいは伸びが停滞していたり、急激に伸びていたりして曲線に沿った成長パターンではない場合など、お子さんの発育が心配な場合は早めに小児科の医師に相談することをおすすめします。

※こうちエコチル調査では、学童期検査に参加していただいた方に成長曲線を含む検査結果の一部をお返ししています。ご参考にしてください。

成長曲線（身長）の例

学童期検査の結果返却より抜粋。（実際の返却は白黒印刷になります。）



＜女子の結果の一例です＞